

2021 年度

国 語
(3期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 50分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

ある内容を人に伝えたいとき、私たちは言葉を使う。たとえば誰かを好きになったとき、その気持ちを言葉にして「愛しています」などと相手に伝える。

さて、このとき「愛しています」と言う言葉を発したほうと、「愛しています」という言葉を受け止めたほうは、同じ内容を共有しているだろうか。「愛しています」と言ったほうは、一〇〇パーセントウソいつわりなく、好きだという気持ちをその言葉にして表現したかもしれない。けれども、その言葉を受け止めたほうはどうだろう。「言葉ではそう言っているけれど、本心はわかったものじゃない」と解釈しているのかもしれない。もちろん、その逆、つまり冗談半分の「愛しています」を本気に受け止めてしまうことだってあるだろう。

言葉は記号にすぎない。だから人によって解釈は微妙に異なる。そういうわけでコミュニケーションは難しい。これは何も恋愛に限ったことではない。皆さんも経験があると思う、「そんな意味でいったんじゃないのに……」と相手に誤解されてしまったことが。言葉を使う意思疎通は、とてもややこしい。

ところが、世の中には「言葉を使わない意思疎通」というものがある。日本ではこれを「阿吽の呼吸」という。

X

実のところ、このようなコミュニケーションは、私たちもふだん知らず知らずのうちにしているのだ。

会議ではよく「この件に関しましては、そういうことでよろしいでしょうか？」などと議長が参加者に質す。「この件」「そういうこと」。部外者には何のことかさっぱりわからないが、会議に参加しているメンバーは、こうした代名詞だけで理解できる。ひととおり座を見回した議長は、何も言わないのを見計らって「ご異議ございませんようですので、この件はどのように進めさせていただきます」と、その場を締めくくる。

日本の会議は、こんな風に進行される事も少なくない。誰も何も言わないことによって暗黙の合意が形成されてしまう。その結論に対して誰かが責任を取るのではなく、その場に居合わせたみんなが責任を共有する。

言葉や行為ではなく、表に出さない密かな意思によって物事を進めることを「腹芸」というが、これも腹芸の一種だろう。何も言わない。「」とカギカッコの中は空っぽ。それでも意志が伝わる。これは日本的なコミュニケーションの特徴の一つで、しばしばわかりにくいとされる。

しかし別の角度から見れば、非常に高度なコミュニケーションともいえると思う。誤解を招く危険性の高さ。責任の所在を明らかにしない曖昧さ。そうしたマイナス面があることを承知の上で、私たち日本人はこうした「空っぽを介したコミュニケーション」を選んできた。ということは、そこにながしかの効率性があるからである。

「意味の交差点」というものがあるでしょう。道路の交差点では、信号というルールに従って事故が起らないように整然と自動車が行き交う。人と人とのコミュニケーションも同じこと。「意味の交差点」では互いに意見を戦わせるが、他人の話を遮らない、人格攻撃はしない、といった一定のルールに則っているからこそ、ケンカにはならない。それでもしばしば「交通事故」は起きる。信条や宗教の違いなど、議論では埋められない衝突点というものもある。

では「意味の交差点」の真ん中に空っぽの空間があったらどうだろう。そこにさしかかったら全員、自分の思うようにそこを解釈してよい、と決めておくとするなら互いにながぶつかるとはならない。「交通事故」は起こりにくい。日本人が選んだ「空っぽのコミュニケーション」とは、そういうことかもしれない。

（原研哉「日本のデザイン、その成り立ちと未来」、『創造するということ（続・中学生からの大学講義）3』所収より一部改変）

問一——線①「同じ内容を共有しているだろうか」の「内容」は何を指していますか。本文から三字でぬき出し、答えなさい。

問二——線②「言葉を使う意思疎通は、とてもややこしい」とありますが、それはなぜですか。次の【文章Ⅰ】を読んだ上での説明として、もつともふさわしいものを【理由の説明】の中から一つ選び、記号で答えなさい。

【文章Ⅰ】

「言葉とは記号である」と考えることがあります。その場合、言葉を文字として表したときの形や声に出したときの音と、それが持つ意味との間には、必然性がないと見なします。ちょうど、赤い色が必ず「危険」の意味を意味するとは限らないのと同じです。あるいは、虹を描くとき、すべての人が「七色」にしないのと同じです。つまり記号としての言葉には、揺らぎのない絶対的な意味はありません。文字や声によって表された言葉の意味は、社会的なルールと、使う人の好みの重なりの中で生まれ、それは人によって、地域によって、時代によって異なるものなのです。

【理由の説明】

- ア 記号としての言葉は形式の単純さと反対に、意味の複雑さという難解さを持っている。よってコミュニケーションにおいても、読み解く上でのやわらかい発想が必要になるから。
- イ 記号としての言葉は絶対的な意味を無視するため、さまざまな意味を与えることができる。よってコミュニケーションにおいては、解読のための高度な技術も求められるから。
- ウ 記号としての言葉は目に見えるものではなく、正確な意味も定まっていない。よってコミュニケーションにおいては、言葉をどれほど知っているかが大きな問題になるから。
- エ 記号としての言葉は意味のなかに使う人のくせなどが入り込み、独自の部分を持つことになる。よってコミュニケーションにおいても、意味のズレが生まれやすいから。
- オ 記号としての言葉は何度も使っていると、だんだんと新鮮さを失っていく。よってコミュニケーションにおいては、最新の言葉の流行を取り入れようとする傾向があるから。

問三 X に次の文章 A B C D はどのような順番で入りますか。説明として筋が通るように、これらを並べかえて、正しい順序を記号で答えなさい。

えなさい。

A そんなオカルトじみたこと……と思うかもしれない。しかし、言葉を介さずに理解しあうコミュニケーションは現実にはたくさんある。

B 一九九二年に外国人初のサッカー日本代表監督に就任したハンス・オフト監督は、試合中に「アイコンタクト」でサインを送る手法を選手に教えた。互いに目と目で伝え合うのがアイコンタクトだ。サッカーのフィールドで選手が他の選手に「五〇メートル先にパスを出すから走れ！」などと喋っていたら試合に負けてしまう。アイコンタクトをサインにして、パッと目配せした瞬間に次の動作を取れ。オフト監督は選手たちにそう指示した。

C 神社の本殿などで左右向かい合わせの狛犬像があるのを見たことがあるだろう。あれは口を開いているほうの狛犬が「阿」と言い、口を閉じているほうが「吽」と言っている。しかも、それを同時に言う。つまり、情報の発信と受信が同時に行われて、言葉という記号を介さずに理解し合っている状態を示している。

D この「アイコンタクト」はまさに「阿吽の呼吸」。言葉はいろいろな。目を合わせるその瞬間に互いに意味を感じ合う。お互いの意味が違ってしまふ場合も当然あるだろう。しかし、成功すればすばらしい速度での意思の伝達が可能になる。

問四 ———線③「それでも意志が伝わる」とありますが、そのような例としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。ない場合は「なし」と答えなさい。

- ア 自分より年上の子が横断歩道を赤信号で渡ろうとしたため、するどい目つきで注意した。
- イ クラスで運動会のリレーの選手を決めるとき、誰も手を挙げなかったので、先生が決めた。
- ウ 母と外出したとき買ってほしいものを見つけたので、その場にはいない父に電話で相談した。
- エ 授業のなかでグループを作って発表の準備をするとき、いちばん成績のよい子に任せた。
- オ 休み時間、その日の黒板を消す係の子が欠席だったため、先生に言われる前に消した。

問五 — 線④「そこにながしかの効率性があるからである」とありますが、この場合の「効率性」とはどのようにしてうまれるものですか。五十字以上五十五字以内で説明しなさい。

問六 — 線⑤「交通事故」と同じ意味の三字の言葉を、本文からぬき出して答えなさい。

問七 — 線「その結論に対して誰かが責任を取るのではなく、その場に居合わせたみんなで責任を共有する」という一文からは、日本における合意の作られ方の特徴を読み取ることができます。その特徴の説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。ない場合は「なし」と答えなさい。

ア 日本において合意は、責任を分かち合うことで、それが個人ではなく集団のものとなるように作られる。

イ 日本において合意は、責任を押しつけ合うことで、決定した責任から逃げられないように作られる。

ウ 日本において合意は、責任者をわからなくすることで、たまたまできたものとなるように作られる。

エ 日本において合意は、責任者をつくらないことで、責任がないものであるかのように作られる。

オ 日本において合意は、一人の責任を軽くすることで、集団の外にも責任を持たせるように作られる。

問八 本文を理解する上で、もっとも関係が深い文章を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 名前がついているのは、ものだけではない。物体の動き、人間の動作に始まって、心の動きなどという、微妙なびみょうことにも、一々それを表すことばがある。事物の性質にも、いや事物と事物の関係にさえ、それを表す適切なことばが対応しているのだ。(鈴木孝夫『ことばと文化』より)

イ 言葉は穴だらけだ。日本語でも他の言葉でも、外から眺ながめてみると、欠けている単語がたくさんあって、どうして、こんな穴あきチーズを使つてものを書くことができるのだろうと不思議になる。(多和田葉子『カタコトのうわごと』より)

ウ 人間のコミュニケーションにおいては、相手と自分との間でどれくらい情報が共有されているか、というのはとても重要な前提で、

それにより話し手が使う表現や聴き手の解釈が左右されることもわかっています。(広瀬友紀『ちいさい言語学者の冒険』より)

エ 言葉はいたるところにあふれています。そのみなもとは人の内側です。すべてそこからやってきます。口から出る前、あるいはペン先やキー操作で文字に変わる前はそこにしか棲息できません。心と言葉を切り離すことはできないのです。(ドリアン助川『プチ革命 言葉の森を育てよう』より)

オ 言語は世界を分割する。分割はモノの分割に限らず、色や、人や動物の動作、人とモノ、モノとモノの関係などにも及ぶ。言語は、世界にもともとそんざいしていない境界線を引くのだ。(今井むつみ『ことばと思考』より)

問九 ――線「空っぽの空間」からは、創造的な楽しみが生まれることもあります。次の【文章Ⅱ】を読んで、後に続く問(a)(b)に答えなさい。

【文章Ⅱ】

子供のころ、僕は親からたいしておもちゃを与えられず、身の周りにあったのは本とレゴブロックだけだった。

「いやいや、ちゃんといろいろ与えていたぞ」と親からは言われるのかもしれないけれど、僕自身の記憶の中には本とレゴしか残っていないから、他のおもちゃにはそもそも興味がなかったか、たいして興味が続かなかったのだろう。

とにかく僕はしょっちゅうレゴで遊び、本を読んでいた。

レゴの面白さは完全ではないことだと僕は思う。

車を作ろうが、恐竜を作ろうが、それはけっして完璧な車や恐竜にはならない。

完成度や緻密さでいえば、プラモデルやソフトビニール人形のほうが圧倒的にリアルだ。それでも僕の空想の中では、レゴの車は実際の車と同じように走っていたし、恐竜はうなり声を上げて他の動物たちに襲いかかっていた。

本も同じことで、文字から浮かび上がる世界の中で、僕は主人公と一緒に冒険に出かけ、たくさん仲間を作り、ときには悲しい別れを経験した。本を開きさえすれば、いつでも今いる場所から離れて空想の世界へ入っていくことができた。

リアルではないレゴと文字しかない本から僕は空想する楽しさを覚え、その世界に浸る心地よさを学んだ。

(浅生嶋『面白い！を生み出す妄想術』より)

(a) 【文章Ⅱ】のなかで紹介されている、「空っぽの空間」があり、そこから創造的な楽しみが生まれるものを、次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 本 イ レゴブロック ウ 車 エ 恐竜 オ プラモデル カ ソフトビニール人形

(b) 本文と【文章Ⅱ】を重ねて読むと、「空っぽの空間」は次のように言い表すことができます。Yに入る漢字三字の言葉を答えなさい。

「空っぽの空間」はYさから生じるものである。

〔一〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

十一歳の「私」の父親は、アーケード(半円形の屋根を持つ商店街)の一番奥に、事務所・倉庫・住宅を兼ねた建物の一階倉庫部分を改造して、買い物客がひと休みできる読書休憩室きゅうけいを作った。そこはアーケードの店のレシートを見せれば誰だれでも好きなだけ利用できる仕組みになっていた。「私」の同級生の「Rちゃん」はただ一人、レシートなしで当然な顔をして大胆だいたんに読書休憩室に出入りする子で、物語が大好きな「私」に「どうしてあなた、嘘うそのお話ばかり読んでるの?」と言い、自分は「本当のお話」が書いてある百科事典をもっとも愛していた。「Rちゃん」はそれを第1巻「あいう」の最初のページからスタートし、第2巻・第3巻と順番に読んでいった。

① あれはどういうつもりだったのだろう。読書休憩室での過ごし方に変化をもたらすためなのか、単なる気紛れきまぐからなのか、時折Rちゃんは声に出して百科事典を読むことがあった。読み聞かせる相手は私ではなく、まだ子犬のべべだった。犬に百科事典を読んでやるにはどういうやり方がいいか、彼女はよく心得こころえていた。② べべが他の犬より多少お利口だとすれば、それはRちゃんのおかげかもしれない。

「アッピア街道　ローマから南イタリアに540kmにわたってのびる古代ローマの幹線道路。紀元前312年に、ローマの監察官アッピウスにより建設されたことからこの名がついた。主に軍用道路としてつかわれたが、ギリシャとの交易路としても大きな役割をはたした。沿道には史跡しせきが多い。舗装ほそうの一部はのこっており、現在もつかわれている……」

べべはRちゃんの足の間に体を納め、お腹を全部床ゆかにつけ、気持ちよさそうに目を閉じているが、耳だけはりりしく立てている。その項目を際立たせる特別な数字やエピソードが出てくると、耳の先端せんたんがぴくりと動く。べべはきちんと講義を聴きいている。

私はRちゃんの声が好きだった。それは小ぬか雨のようにひっそりとして、落ち着きがあり、路面電車の音にも店主たちの「いらっしやいませ」の声にも乱されず、ひたひたとアーケードの中を満たしてゆく。はるか遠くから旅してくるアッピア街道を心からいたわり、余分なものは何も加えず、ありのままの姿で導いてくる。いつしか私は自分の本を閉じ、彼女の声に聴き入っている。べべの耳は一段と研ぎ澄すまされ、産毛の生えた内側の皮膚ひふがうっすらと赤らんでいる。Rちゃんの声に包まれながら、私たちはアッピア街道をどこまでも歩いてゆく。石畳いしだんは固く、白っぽく磨す

り減り、馬車の車輪の跡が窪みになっている。あたりにはオリブの林が続き、木々の間から、崩れかけた石造りの要塞や家畜小屋や水道橋がのぞいて見える。時折風が通り抜け、Rちゃんの手提げ袋と私の髪の毛を揺らす。べべははしゃいで走り回り、私たちを追い抜いては振り向き、後戻りしてはまた追い抜いて、ひとときもじっとしてられない。空は信じられないくらいに青い。初めて見る空のはずなのに、なぜか私たちは懐かしい気持ちに浸っている。街道はまだまだ遠くまで続いている。

「早く、全部読み終わりたいなあ」

心の底からそう願うように、Rちゃんは言った。

「まだまだ、先は長いね」

どっしりと本棚に並ぶ百科事典の背表紙に、私は視線を落とした。Rちゃんはまだまだようやく第4巻に差し掛かったところだった。

「ねえ、見て。第5巻は「し」。一文字で一つの巻だよ。凄いなと思わない？」

「うん」

何が凄いか自信が持てないまま、私はあいまいに返事をした。

「この世界では、し、ではじまる物事が一番多いの。し、が世界の多くの部分を背負ってるの。この、釣り針みたいな頼りない一文字が、実はひそかに一生懸命がんばってくれているんだよ。いいえ、自分は決して何の役にも立ってはおりません、みたいな顔をしてね」

労をねぎらうように、彼女は第5巻の背表紙の「し」を撫でた。

「でもね、だからと言って他の文字をないがしろにしているわけじゃないの。第10巻。栄光の最終巻。「むめもやゆらりるれるわん」。む、から、ん、まで全部で十三文字だよ。十三文字が仲良く手をつないで、十分の一の役目をしっかり担ってる。それが、し、と比べて劣る役目だとは私は少しも思わないよ」

うん、そうだ、確かにそうだ、と私はうなずいた。べべも尻尾を揺らして床を一掃し、同意を示した。

「ああ、最後の、ん、はどんなふうになってるんだろう」

Rちゃんはガラス戸の向こう、アーケードの偽ステンドグラスを突き抜け、アッピア街道を通り抜けたもつと遠くのどこかを見つめて言った。そこを見つめ続けていると、最後の、ん、が支える世界の欠片が浮かび上がってくる、とでもいうかのようなようだった。私とべべは彼女の邪魔になら

ないよう、じっと大人しくしていた。

しかしRちゃんが百科事典の第10巻「ん」のページを開くことはなかった。厄介な内臓の病気に罹^かって、あつという間に死んでしまったからだ。

読書休憩室に取り残されたひまわりの椅子^{いす}には、Rちゃんの重みが窪^{くぼ}みになって残っていた。彼女の体温が残っていないかどうか確かめるために、時折私はその窪^{くぼ}みに掌^{てのひら}を当ててみた。ひまわりはいつまでも冷たいままだった。一方、本棚の中で十冊^{かた}肩^{かた}を寄せ合っている百科事典には、決して手を触^ふれなかった。不思議なことにやって来るお客さんたちもまた、誰一人百科事典を開こうとしなかった。そこにそれが並んでいることにさえ、気づいていないかのように見えた。それはただ一人、Rちゃんのための本だった。

初めて紳士^{しんし}おじさんがアーケードに姿を見せたのは、Rちゃんの死から半年くらいたった頃^{ころ}のことだった。すぐにRちゃんのお父さんと分かった。見覚えのあるあの手提げ袋を持っていたし、読書休憩室に入ってきてすぐ、たくさんの本の中から迷わず百科事典を手を取ったからだ。紳士おじさんはお勤め帰りの夕暮れ時や休日の午後^{ごご}にやって来た。必ず手提げ袋も一緒だった。おじさんはそれをひまわりの椅子の背もたれに掛け、小さすぎるのも構わずそこに座り、第1巻から順番に百科事典を広げた。こっそり覗^{のぞ}いて見ていたのではないかと思うくらい、Rちゃんのやり方と同じだった。

「どうぞ」

私は魔法瓶^{まほうびん}からホットレモネードを一杯^{いっぱい}注いで、丸テーブルの上に置いた。

「ありがとう」

と紳士おじさんは言った。遠慮^{えんりょ}してレモネードを飲まないとすると、ちゃんとアーケードのレシートを持つところだけ、Rちゃんとは違^{ちが}っていた。

「別に、無理にお買い物なさらなくてもいいんですよ」

私は言った。

「そう、堅苦^{かたぐる}しいルールじゃありません。レシートなんかなくても、自由にここへいらして下さっていいんです」

Rちゃんだってそうでした、という一言を私は声に出さずに呑み込んだ。

「いえ、無理をしているわけじゃありません。どうぞ、お気遣いなく」

と、紳士おじさんは言った。声の響き方がRちゃんによく似ていた。

おじさんは毎回、アーケードで何かしら小さな買い物をした。元々アーケードにはXな商品を扱う店は少ないのだけれど、その中でもことさらに小さな品が選ばれた。絵葉書一枚、ピンブローチ一個、石英一欠け、ネジ一本。どれもこれも手提げ袋に入る大きさのものばかりだった。読書休憩室へ通うたび品物は増え、手提げ袋は少しずつふくらんでいった。

おじさんはただ単に百科事典を読むのではなかった。第1巻の、あ、からはじまって順番に一ページずつ、一字残らず全部、大学ノートに鉛筆で書き写していったのだ。

なぜそんなことをするのか、私は一度だけ父に尋ねたことがある。

「さあ、どうしてだろうねえ」

あいまいな口調で父は言った。しかしそこには、わけが分からないというニュアンスではなく、余計な口出しをせずに見守りたいという静かな理解が含まれていた。

「あの時、百科事典を買っておいて本当によかった」

そう、父はつぶやいた。

それは果てしのない作業だった。一日に数時間、来る日も来る日もただひたすら百科事典を書き写し続ける。小さい椅子に体を押し込め、背中を丸め、一字一句間違えないよう息を詰める。そこでは動物が駆け回り、歴史上の偉人がたたえられ、惑星が瞬き、工業機械が分解されている。同じページの中で、河童とカッパドキアと活版印刷が仲良く並び、椰子蟹とやじろべえとヤスパースがにらみ合っている。もちろん、アッピア街道も真っ直ぐにのびている。

次々と大学ノートが文字で埋まってゆき、鉛筆は短くなつてゆく。背中が痛み、ノートは汗で湿り、目はかすんでくるが、紳士おじさんは投げ出さない。理由も考えないし、むきにもならない。この世界を形作っている物事を一個一個手に取り、じっくりと眺め、感触を確かめてからまた元の場所に戻す。それを延々と繰り返す。かつて娘が探索した道をたどり、わずかな気配でも残っていないかと目を凝らし、どんなに望んでも彼

女が行き着けなかった道を、身代わりとなって踏みしめる。

ホットレモネードを一杯注いだあと、私は紳士おじさんの邪魔にならないよう、中庭から読書休憩室を見つめた。ただべべだけは違った。べべはどんなに近くにいても、何の差し障りにもならなかった。Rちゃんの時と同じようにべべは、おじさんの足元に寝そべり、時々尻尾で床を掃きながら、鉛筆の音に耳を澄ませていた。

紳士おじさんの横顔は天井の小さな明かりに包まれている。右手は休みなく動き続け、視線は百科事典とノートを規則正しく行き来し、左手はそつと新しいページをめくる。いつの間にかおじさんの体が椅子に合わせて縮んでいるような錯覚に私は陥る。やがてRちゃんの残像と重なり合っている、二人はどちらがどちらか区別がつかない一つの影となって、百科事典を旅している。Yを一緒に歩いてゆく。

紳士おじさんの来訪は何年も何年も続いた。終わりは来ないのではないだろうか、と感じることもしばしばあった。それが不安のようでもあり、また一方で、永遠を願う気持ちもあった。しかし私の思いがどうであろうと、間違いなく百科事典は一ページずつめくられていった。「そ」「た」がいつしか「ち」「つ」になり、ある日不意に、第6巻が第7巻になった。

火事があった時、心配して翌朝一番にアーケードへやって来たのは紳士おじさんだった。

「大丈夫ですよ」

その姿を認めて、最初に私はそう言った。

「百科事典は大丈夫です」

割れた天井のステンドグラスがあたり一面を覆っている間も、紳士おじさんの読書休憩室通いは途切れなかった。父亡き後もその遺言を守るように、店主たちは皆黙って紳士おじさんの姿を見守った。

百科事典の歩みと比例して、手提げ袋の中身は充実していった。少女のアップリケは色落ちし、所々糸がほつれていた。外国の名刺、押し花、琥珀、豆電球、指貫。まるでアーケードの中に散らばる世界の欠片たちを拾い集め、手提げの中にもう一つ百科事典を作ろうとしているかのようだった。

予想したことではあったが、その時は何の前ぶれもなく静かに訪れた。第1巻のページ、最初の文字からスタートした時と全く同じように、

第10巻の最後の項目が書き写された。Rちゃんが楽しみにしていた「ん」だった。

本当に終わりが来るなんて、と信じられない思いで立ち尽くす私の傍らで、紳士おじさんは全く普段と変わりなかった。拳を震わせるでもなく、嗚咽するでもなく、ただ鉛筆を置き、消しゴムのかすを払い、残っていたホットレモネードを飲み干しただけだった。そうして百科事典第10巻を閉じ、表紙を撫で、両腕に抱えて本棚に仕舞った。それでおしまいだった。

私とベベと店主たちはアーケードを遠ざかってゆく紳士おじさんの背中を見送った。その手元では、Rちゃんのいる世界を納めた手提げ袋が揺れていた。以来、二度と紳士おじさんが姿を見せることはなかった。

「ンゴマ 南アフリカ共和国の北東部にあるトランスバールの民族楽器。この地方に住むベンダ族が用いる大型の太鼓で、木でつくられたつぼの形の胴の上面に革がはられている。地面におき、一本のばちで革をたたいて音をだすが、ふつう奏者は女性である。合奏のときは、ミルンバとよばれる高音用の太鼓とともに用いられる」

(小川洋子「百科事典少女」より一部改変)

問一 ——線①「あれ」はなにを指していますか。「〜こと」につながる形になるように、本文から十五字以内でぬき出し、答えなさい。

問二 ——線②「心得ていた」、——線③「堅苦しい」、——線④「差し障り」の意味としてもっともふさわしいものをそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

②「心得ていた」

ア 注意していた イ 大事にしていた ウ 秘密にしていた エ 教えていた オ 理解していた

⑥「堅苦しい」

ア 困難な イ 窮屈な ウ 複雑な エ 大げさな オ 頑丈な

⑦「差し障り」

ア 緊張感 イ きっかけ ウ 接触 エ 不都合 オ 気休め

問三 — 線③「道路」と同じ組み立ての熟語として次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 公私 イ 平和 ウ 青葉 エ 不快 オ 乗馬

問四 — 線④「街道はまだまだ遠くまで続いている」とはどのようなことを述べていますか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、

記号で答えなさい。

- ア Rちゃんの百科事典の読み方は臨場感があるということ。
イ アップピア街道は540kmもあり、とても長いということ。
ウ アップピア街道の説明を読み終わるには時間がかかるということ。
エ アップピア街道の行き先がどこか分からないということ。
オ Rちゃんの百科事典への思いは計り知れないということ。

問五 — 線⑤「時折私はその窪みに掌を当ててみた」とありますが、「私」がこのようなことをしたのはなぜですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア Rちゃんの突然の死に動揺した「私」が、Rちゃんがまだ生きていると信じてしまっていたため。
イ Rちゃんの死後、「私」がRちゃんとの思い出を振り返ると、それがとても楽しいものであったため。
ウ Rちゃんは死んで間もないので、「私」は椅子にRちゃんの体温が残っているかもしれないと考えたため。
エ Rちゃんが使っていた椅子に、「私」が他の誰かが断りなく座ったかどうか確認しようとしたため。
オ Rちゃんが死んでしまった後も「私」はRちゃんが死んだことをしっかりと実感できていないため。

問六 X に当てはまる語としてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 奇妙 イ 微妙 ウ 貴重 エ 大仰 オ 安価

問七 Y に当てはまる六字の言葉を、本文からぬき出し、答えなさい。

問八 ——線⑧「それが不安のようでもあり、また一方で、永遠を願う気持ちもあった」とありますが、これは「私」のどのような気持ちを表していますか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 紳士おじさんの様子が生前のRちゃんと似ていることでRちゃんを思い出す一方、そのあまりにも似ていることに対して恐れる気持ち。

イ 百科事典をすべて書き写すことは非常に大変なことであるが、たくさんの時間をかければ成し遂げることができると信頼する気持ち。

ウ 紳士おじさんの常識を超えた行動には恐怖すらおぼえるが、それはRちゃんを思っている行動であると紳士おじさんを理解する気持ち。

エ 紳士おじさんが百科事典を書き写し終わるか心配だが、その作業をしている時間は、「私」にとっても大事な時間であると慈しむ気持ち。

問九 ——線⑨「手提げの中にもう一つ百科事典を作ろうとしているかのようだった」とはおじさんの行動に対する「私」の感想ですが、これには「私」のどのような推測がふくまれていると考えられますか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 紳士おじさんがさまざまなものを入れることで、手提げ袋がどんどん百科事典のように重くなっていていっているのではないかという推測。

イ 紳士おじさんが百科事典で読んだものを購入して手提げ袋に入れることで、百科事典を再現しようとしているのではないかという推測。

ウ 紳士おじさんが手提げ袋の中にさまざまなものを入れて持ち歩いているのは、偶然おこなってしまっていることなのではないかという推測。

エ 紳士おじさんが手提げ袋に入れているさまざまなものは、Rちゃんが生きているときに購入した小さな品ばかりなのではないかという推測。

オ 紳士おじさんが手提げ袋の中にさまざまなものを入れるのは、Rちゃんがいた商店街を確認しようとしているからなのではないかという推測。

問十 本文は百科事典の最後の項目である「ンゴマ」の項目を引用して文章を終えています。作者がこのような形で文章を終えたのはなぜだと考えられますか。その理由として考えられるものとして次の中からふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 実際に百科事典の最後の項目の文章を省略することなく記し読者に示すことで、読者にもRちゃんと紳士おじさんの願いが叶った瞬間を共有し、その喜びや感動を味あわせるため。

イ 南アフリカ共和国の楽器について最後に述べることで、アフリカ大陸最南端に位置する南アフリカ共和国の歴史やそこに住む人々の考えと紳士おじさんの行動を対比し、読者に示すため。

ウ 紳士おじさんの行動ではない物事である辞典の項目の引用で物語を終えることで、紳士おじさんがRちゃんへの思いを断ち切り、彼自身の人生をこれから歩んでいくことを読者に暗示するため。

エ 本作において百科事典はRちゃんと紳士おじさんをつなげるものであるが、その重要な意味を持つ百科事典の最後の項目を記して物語を終えることによって、物語の結末を印象深くするため。

オ 百科事典の最後の項目である遠い異国の楽器について説明することで、紳士おじさんの行為やRちゃんの願いの果てしなさや紳士おじさんの行為が達成した感動を、読者にも共有させるため。

カ 物語の終わりで通常女性が演奏する外国の楽器である「ンゴマ」について述べることで、Rちゃんという物語の途中で死んでしまった少女の存在を最後に改めて読者に意識させるため。

問十一 本文で紳士おじさんは百科事典を書き写していますが、このような行動をしているのはなぜですか。その理由を説明しなさい。

問十二 次の文章を読んで後の問い (a) (b) に答えなさい。

「一線」この世界では、し、ではじまる物事が一番多い」とは、「言葉は」しではじまるものが最も多い」ということとです。これは本文においてRちゃんか、「し」からはじまる言葉が百科事典の二巻分もあることから判断しています。このように辞書において特定の文字ではじまる言葉の量を比べることは簡単です。しかし、特定の文字で終わる言葉の量を比べることは難しいでしょう。ところが、ある方法を使うと一般的な紙の国語辞典のみで、どの文字で終わる言葉が最も多いのか簡単に推測することができます。

その方法とは「辞典の好きなページを開いて、見出しの終わりの文字を調べる」というものです。それだけで辞典全体のことについて分かるのだろうか、と思うかもしれませんが、全体を調べなくても二部のことから全体の傾向を知ることができます。実際に辞書を見てみましょう。左のものは『新明解国語辞典第四版』のとある一ページです。

- かんぱん①乾板「写真感光板の二つ。ガラスに感光乳剤を塗った板」②干板
- かんぱん②乾板「乾板を写す板」
- かんぱん③乾板「乾板を写す板」
- かんぱん④乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑤乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑥乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑦乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑧乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑨乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑩乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑪乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑫乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑬乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑭乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑮乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑯乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑰乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑱乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑲乾板「乾板を写す板」
- かんぱん⑳乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉑乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉒乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉓乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉔乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉕乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉖乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉗乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉘乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉙乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉚乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉛乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉜乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉝乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉞乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㉟乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊱乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊲乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊳乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊴乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊵乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊶乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊷乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊸乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊹乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊺乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊻乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊼乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊽乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊾乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊿乾板「乾板を写す板」
- かんぱん㊿乾板「乾板を写す板」

見出しの終わりの文字を見てみると、「う」で終わる言葉が十二個あり、このページで最も多いことが分かります。もちろん、このページについて調べただけでは、辞書にあるすべての言葉についてはっきりと述べることはできません。しかし、『う』で終わる言葉が多そうだと推測をすることはできます。実際に辞書のすべての言葉を見てみると、「う」と「ん」が終わる言葉が同じくらい多く、次いで「う」「へ」「ぬ」で終わる言葉が多いことが分かります。

このような一部のことから全体の傾向を知る調査の方法は、他のさまざまな調査に使われています。

(a) このような調査方法が実際に使われていそうなものとしてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ある海域のプランクトンの量の調査
- イ ある山頂の海からの高さの測定
- ウ ある国の車の年間出荷台数の調査
- エ ある学校の生徒全員の身長測定
- オ あるコンサートの入場者数の調査

(b) あなたは鎌倉市の、犬が好きな人と猫が好きな人の割合を知りたくなくなりました。その割合を推測する方法を具体的に説明しなさい。

〔三〕

次の――線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

- ① スターの登場にカンセイを上げる。
- ② フゼイのある日本庭園。
- ③ 時にはうそもホウベンだ。
- ④ 彼女の言動はイサギヨい。
- ⑤ 新しく事業をオコす。
- ⑥ 資料をモトに会議を行う。
- ⑦ 金星は明星とも呼ばれる。
- ⑧ 飼い犬の行方が分からず不安だ。
- ⑨ 老犬の最期さいごを看取る。